

# ブルーヘア

須永 淳

駅前からのびるシャッター通りにあるラーメン屋「ら・めん」がついに閉店した。「三十年は続いていた」と、俊作は自治会の寄合の際に隣組の長老から聞かされた。

「ところがよ、閉じてひと月になるのに女房は見ても主人の姿をとんと見かけなくなつた。どうしたんだらうね。心臓をやられたかガンで入院でもしているのだろうか。偏屈だったけど、会わなければ会わないで寂しいね」と、一段と声をひそめた。

「夏を過ぎて、食べに行くこともなかったから、気がつきませんでした」

「もつともだ。最近はおなじ町内でも、あえば会釈はしてもことばを交わさないからね」と、長老は続けた。

五つの町内会を束ねる自治会の話合いの議題は災害時に高齢者をいかに安全、迅速に避難させるかであった。自治会に防災組織はない。役所からは該当者名簿を配布するか自治会で対応してほしいと要請された。俊作の町内会は二十の戸建てがあるが、二軒を除いて高齢者の夫婦二人住

まいか独居世帯。住み始めて五年もしない俊作は町内持ち回りの順番で会長を引き受けたが、どの高齢者が町内のどこに住んでいるのか知らない。だが、それではすまないと思っていると「名簿をもらっても困りますよ、避難訓練さえしたことがないんだから」と、会場からしわがれ声が上がった。すると長老がぼそりと呟くのが聞こえた。

「独り暮らしには煩わしいだけだ。勝手に避難するさ」  
大型のショッピングモールが完成し、高齢化の進んだ商店街は揚げ物屋にはじまり、本屋、惣菜と弁当屋、鮮魚店、酒屋、雑貨屋などが相次いで店を閉めて久しい。アパート住まいの若者たちは町内会に入らない。そうしたなかで「ら・めん」だけは続いていた。

店の奥にある調理場で賄をしながら男がピサの斜塔になり、躰を傾げて店に出ている女房を見張っていた。白髪交じりの男の愛想の悪さを女房が補った。

「なにしてるんだ。早くせんか」「ラーメンを配ってる。こちらさんはラーメンを美味しそうに食べてるわ。あ、は、はっ」と、はちきれんばかりの胸と尻をぷりぷりさせながら若作りの声を上げていた。するとその都度、チツ、チツと舌打ちするのが聞こえ、女房はそれを煽るようにふたたび「あ、は、はっ」

スープは今はやりの豚骨から絞り出す脂の浮いた濃厚味でなく、ナチュラル嗜好をうたい文句にしたさっぱり風味



だ。若い俊作には物足りない。麵も中途半端に柔らかい。それでも食べに行つたのは、三千円以上を食べるとオマケにカブトムシをくれる、と二人の子供にせがまれたからだ。家族四人なら丁度その金額になる。女房が発案したようだが、うまい客寄せだった。ところが、カブトムシは世界的に高栄養価の昆虫食として普及している。それで養殖を始めたが増えすぎ、苦肉の策をとつた、という噂もあつた。

男と女房の掛け合いの騒々しさにうんざりしながら食べ終えると、二階の隅に設えてある養殖場へ案内された。子供たちは興奮したが、俊作は薄気味悪かつた。暗闇の中で夥しい数のカブトムシが止まり木に取りつき、飛び、床土の上を這いまわっている。チツ、チツと耳障りな音が聞こえたから、男の舌打ちかと耳を澄ませば金網をよじ登る音だった。

ホームセンターでプラスチックの小型のコンテナを購入し、教えられたように床土を作り、小枝と落ち葉を入れた。メスとオスのつがいだから、仲がいいかと観ているとオスは夜ごと燃え上がり、強いあしと角でメスを蹴とばし、転がし、さんざんにひっくり返していた。

ところが夏の盛りの頃、オスがまるで動かなくなつた。いつまでたつても動く気配がない。もしかしたら燃え尽きてメスにひれ伏そうとでも心変わりをしたのでもあるまいと窺っていたが、ただ蹲っているばかりだ。しびれをきら

してコンテナの蓋をずらしてオスを持ち上げた。軽い。ひっくりかえしておなかを見た。見事なまでに抉り取られ、殻だけになっている。まさか……だ。オスのはらわたを喰いつくすなんて、よほどの恨みか、愛おしすぎたのか。普段のエサは昆虫ゼリーかバナナだ。そもそも樹液をなめている。それが、と訝っている裡に夏も終わりの頃、メスが消えた。

カブトムシがいなくなり、子供たちはコンテナを放り出した。その数日後、男はカブトムシになり、金網をよじ登り、舌打ちをしながら、メスを転がしていた。紅いルージュをひいた熟れすぎた女が「スープだって美味しいでしょう」と哄笑している夢から俊作は覚めた。

以来、俊作は「ら・めん」に行っていないが、長老が話題にしたからふとあのカブトムシを思い出した。

「ついこの前奥さんに会ったら、髪をブルーに染めていたよ。まったく、なんだろうね、あれは。白髪隠しかい」

「いつも愛想はよかったですけど返青ですかね」

「女の愛想は怖い。化けものかもしれない」  
司会を務めていた役所の担当課長が「高齢者の避難対応は、あくまで善意でお願いします。名簿は町内会長にのみ配付します」と話合いを締め括つた。長老はなぜかほっとくつろいだ様子で、まあそんなものだよ、と言ひ残して帰って行つた。